読者サロン

イラスト：SHIGEUO-MASAI

漫画の突破口を開く

小山一行（東京）

創作は、その表現形式が所有する必然的な制約との戦いである。近代の漫画（という呼び方が適当かどうか）に於て、手塚治虫以後その戦いを敢えて強行し得た作家が果して何人居ただろうか。

僕は、漫画の可能性に一つの突破口を開いた一人として、つげ義春をあげたい。

「紅い花」は、「山椒魚」から「海辺の叙景」に至る一連の作品の中に受け継がれてきたつげ義春の世界の、結晶ともいうべき作品である。

漫画と文学とを比較する事が、どれ程の意味を持つか僕は知らないが、「紅い花」のファウストシーンを読んで、僕の脳裏をかすめたのは、漱石の「草枕」であった。そして、その考えは、読み進むにつれて確かさを増して行った。僕は、この作品が、山村の一少女の性への目覚めを描いたものであるという事には、さほど興味はない。唯、この少女の持つ不可思議な美しさに心を魅かれ、この様な前人未踏の主題を、かくも明僚に視覚化し得た作者の力量に敬服するのみである。

作者はこの作品の中で、全く東洋的静観の立場から〃キクチサヨコ〃と〃シンデンのマサジ〃を見ている。そして、それがこの少女を限りなく美しくしている原因の一つであろう。文学に於て「東洋」を書き得た数少い作家の一人として、漱石をあげることができるとすれば、漫画に於て「東洋」を描き得た唯一の作家として、つげ義春の名をあげるのは冒険ではあるまい。

つげ義春にとって「東洋」とは「静観」の世界であり、そこから生まれる感情が、登場人物に対する限りない愛着となるのである。「山椒魚」ではまだ内閉的であった解脱の世界は「峠の犬」では孤独な犬に対する愛情となり、この「紅い花」に至って初めて〃人間〃に対する愛着となるのである。そして、この〃人間〃に対する「非人情」的愛は、「西部田村事件」では一層明確になっている。

低迷を云々される現今の漫画界に於て、つげ義春の存在は一つの救いである。僕は、漫画という表現形式の伝統的制約を脱して、新たな世界を創りあげたつげ義春の未来に、心より期待を寄せるのである。

〃難解〃という評について

井上　耕（東京）

マンガという、体制の文化組織化の盲点であり、かつ極めて大衆性豊かな伝達手段を使って、ぬっぺらぼうな現代日本の福祉大衆社会にゲリラ攻撃—いやこれこそ正規戦かも知れませんが—をかけるものとして、「ガロ」を評価してきました。十二月号の読者サロンを読み、とじ込みの読者調査用の葉書を拝見して、その様なものであったろう「ガロ」の編集方針が、方法的に、つまりどの様な作品を載せて行くかという点に於て、ゆり動かされたように感じましたので、現方針支持の援護射撃を行ないたいと思います。

N・S・K従業員一同さま、もう一度「ガロ」創刊号から最近号迄を読み返していただきたいのです。なる程、新人作家特に入選作と称するものに於てつまらない、ほんの思いつきだけで書いた様に見えるものが、いくらか見受けられます。しかし総体としての質の高まりは、独創的なマンガ作家達—楠勝平・つげ義春・永島慎二・池上遼一・滝田ゆう・勝又進氏等—の活躍によって圧到的なものと成って来ているのではないでしょうか。確かに、これらの作品は、時に非常に難解です。しかし、「ガロ」の作家諸氏が、つい最近迄は、手塚治虫氏程度の達成がその最高峰であったマンガというジャンルを駆使して、この不合理かつ複雑極まる現代の社会と人間に真向い、その中からぎりぎりの真実という得がたいものを掴み出してこようとする以上、表現が難解となるのもまた仕方のないことではないでしょうか。どうぞ難解だなどと投げ出さず、少なくとも百五十円分だけは、読み返してみて下さい。例えば10月号のつげ氏の「紅い花」。清冽な山の河に、峠の茶屋に一人住む少女の体からあふれながれる紅い花はなんと美しいではありませんか。山腹の草原を少女を背負って下る少年の姿と、「眠れや」という彼の言葉には、僕らをしんから感動させる何かが在るのではないでしょうか。それらは、一人の人間が成長するのを目にする時の喜び、或は、人間の真の連帯を見る時の感動などと解説をつけては、つまり分り易く書いてしまっては、失われてしまう、稀な真実に満ちています。また8月号所載の池上氏の「夏」を読み返してみて下さい。石原慎太郎君がほざく様に、今日僕らはベトナムの血をすすって生きる事を押しつけられ、それを受容しています。僕らは数々の平和運動にもかかわらず、ベトナムの殺戮を止め得ません。ベトナムは、僕らの無恥、怯懦、腐敗の集中的な現れとしてそこにあります。この様な現実を心に置いて、「夏」を読めば、その暑さと、僕らの外部にわき、そして飛ぶ蠅ばかりでなく、まさに僕らの内部から発生し、僕と少女との愛をも不可能にす

る蝿の意味は、深く、日常意識を根底からひっくり返すものとして、のしかかってくるのではないでしょうか。　次に川野氏にひと言、主に新人作家についての御意見だと思いますが、同感です。佐々木マキ氏を除いて、新人にはどうも良い所がないようです。しかし、つげ氏の商業少年雑誌時代、楠氏の忍法秘話時代から読み知っている僕には、どうもそう性急には責められないように思えます。作者が真の感動を読者に伝え得るためには、作者が自身の生を真剣に生き抜くことによって、身にしみついた彼自身のテーマを掴み取ってこねばなりません。多くが若い人達であろう彼ら全員に、そこ迄要求するのは無理と思います。新人の成長を助け、暖く見守ろうとする「ガロ」編集部に敬意を払おうではありませんか。

以上いささか「ガロ」を褒め上げすぎたようですが、「悪貨は良貨を駆逐する」資本主義社会の法則と、一億総白痴化をめざす体制の文化政策に抗して、良貨を送り続ける「ガロ」の提灯を持った一席です。お粗末さま。

「ガロ」に見る"もののあわれ"

川越　良子（鹿児島・16歳）

「ガロ」十二月号の川野緑さんによる「ガロ」についての感想を最初は黙って読んでいったのですが、徐々にただならぬ憤りを感じました。彼女が全然まったくわからないといったのは、どの作品をさして、言ったのでしょうか。「カムイ伝」と「水木しげるマンガ」以外は読めないですって！　この方はいくつなのでしょう。私は十六歳ですが、その年なりに解釈して消化し得ました。つまりあなたは読みが浅かったのではありませんか。

全然読めないマンガ（あなたはこう言っておられます）の作品は、あなたに理解してもらいたいと、それなりの意図をもって描いているのです。あなたはそれを受容する立場にある人のはずです。まだ新芽に向って大木になれとは、あなたは「ガロ」の愛読者ではありません。作者の意図からエスケープして意味をとってしまったのでしょう。

私は高校生ですが、「ガロ」には、この高校一年という、いえ高校生、広い意味の思春期の男女ならば、だれもがこの「ガロ」に感動し、また空虚な気持ちの我々の心情をさらに一層さびしくさせます。具体的に言うならば、普通の少年少女雑誌の感動は実に美しいものです。また実に心に残るものです。しかしこの芸術的ヒューマンライフ作品ではそんな感動はありません。空虚感、無常感もしくは無情感の流れです。

「ガロ」を読み終えたときの亀裂にはまりこんだような心情は言い表わし難いものです。古典的に言い換えるならば"もののあわれ"そういうものにつながりを持つと思うのです。確かに古典文学では娯楽的感動はありません。暗中模索的読後感で徐々にその意味を理解し、吸収していくのです。わたしは鴨長明の「方丈記」を非常に愛しています。さきに「ガロ」に無常感があると書きましたが、そういう意味でなのです。

秀れて面白い新人作品

松野しげる（大阪）

最近のカムイ伝には全く目を覆いたくなる。絵自体の質の底下には、まず目をつむるとしても、その図式主義的・原則主義的なストーリーの展開にはがまんならない。実にクソリアリズムの残骸を押しつけられるようでいやである。主人公をあまり理想化し、原則に解消すると、その作品はつまらなくなる。

この種の作品は『現実の諸関係の忠実な描写によって、その上にかぶさっている因襲的な幻想をひきさき、ブルジョア世界の楽観主義をぐらつかせ、現存するものの永遠の正当性に対する疑惑感をさけがたいものとするならば、直接解決を与えないでも、いや、事情によっては、自らの目に見えて党派的立場をとらないでも、その使命が完全に果されるのです。《エンゲルス、ミンナ・カウツキーへの手紙》』この視点を失うと、芸術は手段としてのみ用いられ、無内容となるであろう。

しかしながら、他の新人には秀れておもしろい作品が多い。今の所、一般的に言って白土、水木以外は殆んどすべてがおもしろいのではなかろうか？　つりた氏《この人が女性とは信じられぬ》、つげ氏、たきた氏etc、とりわけつりた氏はすぐれている。つげ氏の「山椒魚」は楽しかった。カフカの「変身」のモチーフに類似しておりリアルである。永島氏の「仮面」は、おそらくガロ中最高傑作の一つではなかろうか。資本主義体制下に於ける人間の自己疎外と、それを止揚する方向とをまざまざと見せつけられた。つりた氏《本当に女性か？》のシニカルなマンガにはギクリとさせられる。生きるための闘争、あがき、ジンロク・ナンセンスetcに終始一貫してるカミュ的、おそらくは白土氏と対極をなす、水木に似たセンスの持ち主である。氏のマンガはおがわ氏の道徳主義的、スコラ的禁欲主義者のバカ正直マンガよりは、どれだけ説得力があるか判らぬ。サド的リアリズムに通ずるのではなかろうか。

大学生勝又クンにはもっとハッスルして欲しい。べ平連的、市民主義的反逆は幻想であろう。

最後に、12月号の日本醤油協会従業員の方々へ。自分の範囲で理解して、作品に文句をいうのは自由であろうが、それが「常に一般的であるとはかぎらない」ことも理解すべきではなかろうか？

日本忍法伝

第25回

作・佐々木守
え・岡本颯子

読者へのお詫び

実にぼく個人の勝手な都合により、十月号をとばし、更に十二月号と一月号を休載させてしまったことを、読者の皆さんと編集部に深くお詫びいたします。

一つはぼくの所属する創造社が『無理心中・日本の夏』『絞死刑』とつづけて二本の映画製作に突入することになったからです。二本とも大島渚監督作品で、前者はすでに封切られていますが、後者の『絞死刑』は、この本がお手もとに届くころには、おそらくクランクアップ、完成しており、一九六八年の一月に、アートシアター系で全国封切される予定です。アートシアターといえば、一九六七年の二月、『忍者武芸帳』を公開し、皆さん方のおかげで大ヒットとなったのですが、一年たった二月に、また『絞死刑』を封切ることになったものです。

『絞死刑』は、小松川事件として有名な、朝鮮人少年李珍宇の小松川高校の女高生殺しを扱ったものです。李君は死刑の判決を言い渡され、仙台の宮城拘置所ですでに死刑を執行されてしまいましたが、ぼくたちはこの事件を、単に朝鮮人問題という視点からだけでなく、死刑の問題、ひいては国家権力による人間の抹殺の問題として取り上げました。

集められる限りの資料にもとづいてつくりあげた死刑執行場は、おそらくほとんどはじめて公けにされる正確な刑場であろうと思います。『忍者武芸帳』の公開を御支援下さった読者諸氏の、再びの御声援をお願いいたします。

お詫びが宣伝と一緒になってしまいましたが、ぼくが『日本忍法伝』の執筆をなまけたもう一つの理由は、あるテレビの仕事のため、ハンコック、ネパール、インド、セイロンと海外をまわっていたことにもあります。ネパールのホテルの窓からは、はるかにそびえるヒマラヤの山々が見えていました。その山をこえた彼方、そこがいわば『日本忍法伝』のまぼろしの舞台でもある騎馬民族の活躍した大平原であることを想うとき、いささか感無量でありました。

お詫びが、結果的に調子のいい話になってしまいましたが、今後、このようなぶざまなことにならないことを、読者の皆さん並びに編集部にお約束して、新たな気持で『日本忍法伝』をつづけていきたいと思います。

ほんとうに申しわけありませんでした。

前回までの梗概

四世紀の前後、満蒙、北シナ方面に大活躍した東北アジアの騎馬民族は、やがて朝鮮半島を席巻し、怒濤の如く日本列島へ侵入した。

当時の日本は、出雲大社を中心とした農耕民族（出雲族）によって、のどかで豊かな銅鐸文化の国であったが、自由に馬をのりこなし、大陸での闘いになれ、圧倒的な武器を持つ騎馬民族のため、出雲族はまたたくうちに国を奪われ、長い流浪の旅にのぼった。

朝鮮に政権をもっている騎馬民族は、かつて四世紀中半、日本にも新たなる征服王朝をうちたて、大和朝廷と名のった。

そして二百年——、大和朝廷は、日本古来の民族であると歴史を偽り、人民を瞞着して、その支配を穢内から九州、そして東北へと広めつつあった。しかし、そのシャーマニズム信仰に反対する出雲族は、全国各地にちらばって、銅鐸を守りつついつか再びあの白雲八雲たつ出雲へかえる日を虎視たんたんと狙っていた。だが、大和朝廷の弾圧は日々にはげしく、かくれすむ出雲族は、一つまた一つと討ち滅され、恭順を誓わせられ、やがて、その子孫たちさえ自らが出雲族であることを忘れようとしている頃、聖徳太子につかえた忍者・鳥の息子・弓月は、ふとしたことから、銅鐸のもつ妙なる音色に心をひかれ、とらわれの出雲族の女・玉櫛に恋を感じる身となった。

その玉櫛は、大和朝廷の秘密軍隊・能登軍団の隊長・白布の思い女であったが、大化改新の乱をきっかけとして弓月と玉櫛は結ばれる。しかし二人が結ばれるまでには、飛騨にかくれた出雲族の娘・若菜が弓月の子を生んで死ぬという悲劇が

あった。玉櫛は若菜の子を背負って、弓月と行を共にする。

　六四五年、自らの勢力伸長を計った蘇我氏は、出雲族数千と手を結び、大和朝廷に反乱をくわだてたが、中大兄皇子と秘密軍隊・能登軍団のために、あえなく馬子、入鹿が殺されて、ここに騎馬民族の日本支配は一応の完成を見たかに思えた。うたがいもなく、大化改新とは中大兄皇子を中心とする騎馬民族の征服王朝が、その基礎固めのために行なった軍事クーデターであったのだ。

　しかし、破れた出雲族は、弓月を中心に北へのがれ、そこで蝦夷の一団と合流する。そして共に追われもの同志団結して大和朝廷に対抗すべく、更に北へ向かった。

　一方、出雲族と蝦夷の連合軍に、生まれてはじめての敗北を喫した能登軍団の白布は、飛鳥の町で悶々の日を送っていたが、そこで妖しい美しさをふりまく女・額田王を知る。額田王こそ、中大兄の弟・大海人皇子の恋人であったが、天性娼婦である彼女は、中大兄にもまた身をまかせていた。

　かくて、どすぐろい渦が飛鳥の都にたちこめる頃、中大兄は、阿部比羅夫を隊長とし、白布を副隊長とする蝦夷討伐軍を北へ向かって派遣しようとしていた。

第二十一章　北の挽歌

(一)

「清麻呂、清麻呂」

　玉櫛は忙しげに立ち働く人々の間をかきわけるようにして歩いた。

「清麻呂、清麻呂」

　齶田(あきた)の浦(現在の土崎港あたり)は雄物川の河口にあたる。春四月、蝦夷と出雲族とを問わず、働ける男女はすべてこの浦に出て働いている。木を伐るもの、葛を結ぶもの、木をけずるもの……。舟は一そう、また一そうと出来上がっている。

　蝦夷と合流した出雲族は、いよいよまだ見ぬ地、北海道へ渡るべく、ここで舟の準備をしていたのである。すでに渟足(ぬたり)の柵、磐舟の柵と、大和朝廷の勢力は、現在の新潟県から秋田県まで入りこんでいた。

　蝦夷の首領ワッカは、一度北の島へ渡り、そこで軍をととのえて大和へ攻めのぼる計画をたてた。そして、この舟づくりなのである。

　春四月、陰暦の四月は現在の五月から六月にあたる。春おそい東北にもようやく陽光がさしはじめ、水ぬるみ、すべての若葉が出そろっていた。

　男たちの軽口に女たちが笑い、子どもたちもまた一心に木をけずる。

　そのはちきれそうな喜びの中を玉櫛は歩む。

「清麻呂、清麻呂」

　清麻呂とは、若菜と弓月との間に生まれた子どもの名である。

「どうした、玉櫛」

　舟づくりの男たちの中から弓月が声をかける。蝦夷にならったのか、剃らずにおいたひげが黒くたくましくのびて、胸のあたりまでたれている。

「清麻呂の姿が見えないんですよ」

「あいつ、また川へでも魚とりに行ったんじゃないのか」

「いいえ、いつもいっているところにも姿は見えません」

「気にするな、清麻呂ももう八つ、たまには自分で好き勝手に遊びまわってみたいのだろうよ」

「でも……」

　生さぬ仲とはいえ、生まれてすぐに自分の手に抱きしめた清麻呂を、玉櫛は自分の本当の子以上に、いとしく思っている。

「お前のように、そういつでも自分のそばにおいておきたがっては、清麻呂は女の子のようになってしまうぞ」

　どっと蝦夷の男たちが笑った。そういえば子どもの頃からいれずみをして、五つにもなればもう一人前に魚とりをしたりする蝦夷の子にくらべて、出雲族の子どもは色も白く、

ひよわに見えた。酒をのむと男たちはいつもそう言って笑うのだ。
　弓月のことばに玉櫛も苦笑する。そう言えばそうかも知れない。あの子はいつも私と一緒だから、遊ぶのも女の子との場合が多く、性質もやさしい。そこのところがまた玉櫛には、よりいとしく思われるのであったが……。
　玉櫛はふっと岬の岩の上の、小さなほこらに黙礼すると、自分の仕事にもどった。
　岬のほこらには銅鐸がまつってあった。たった一つ守りつづけてきた銅鐸が、日本海を見下ろす岩の上の小さなほこらにまつられているのである。
　それは、かつて、出雲のわき上がる雲をのぞみつつ天にそびえていた出雲大社への、あかぬ郷愁のなせるわざだったのかも知れない。
　そのほこらの中に、いま清麻呂は、いた。清麻呂は、いつも玉櫛や弓月や、そのほか大勢の人々がおいのりするこの銅の置物に一度さわってみたくてたまらなかったのである。
　清麻呂は、ひとりこっそりとほこらの中へ入ると、柵をのりこえて銅鐸に近づき、もってきた木の棒で銅鐸をたたいた。
　コオオン　とそれは小さなひびきを発した。
　きれいな音だな、――清麻呂はもう一度たたく。コオオオン、コオオン、あんまり大きくたたくと、みんなに知れてあとで叱られるぞ。そう思いつつもう一度……。
　コオオオン……。
　銅鐸の音の中で、「ウフフフ」という少女の笑い声をきいて、清麻呂はびっくりしてふりかえった。
　そこにいたずらっぽい笑いをうかべて立っていたのは、蝦夷の少女ユカラである。ユカラは十三歳。いつも玉櫛のところへ来て織物や縫物を習っていた。蝦夷の十三歳は、そろそろお嫁にいく年なのである。玉櫛のところへ来ながら、ユカラは清麻呂の子守りもよくしてくれた。だから清麻呂はユカラを大好きなのである。
　「清麻呂、神さまにそんなことをしたら、みんなに叱られるわ」
　「ユカラ、つげ口するのか」

「そうね、どうしようかしら」
「つげ口するならしたっていいよ、そのかわり、ユカラはおしゃべりだってみんなに言いふらしてやるから」
「平気よ」
「そしたら、男たちは誰もユカラなんかお嫁にしないぞ」
「清麻呂！」
ユカラはふざけて清麻呂の頭をコツンとぶつ。
「いいよ、そうなったら、おれがお嫁にしてやるから」
「フフンだ。そうなると困るから私はつげ口なんかしないわ」
「ユカラ、おれが嫌い？」
「バカね、さ、帰りましょう」
ユカラは、清麻呂の手をひいてほこらの表へ出た。
「ユカラ、おれが嫌い？」
清麻呂はユカラを見上げてもう一度きく。
「うん、そうだな、好きかな、でもいたずらするからちょっぴり嫌い」
しかし、清麻呂の返事はない。
清麻呂は、いま、目を細めるようにしてじっと沖を見つめているのだ。
「どうしたの？」
「あれは何だ？」
清麻呂は、はるかな沖を指さす。
「なアに、どれ？」
「ほら、あすこ、まるで魚の大群のような、嵐のときの波のようなものが見えるだろう。
ユカラもじっと沖をみつめる。
たしかに見える。しずかな波のはるか彼方に、ゆらゆらとゆらめくように、まるで島のような、怒濤のような黒いものが見えるのだ。
「清麻呂！」
ユカラの声がうわずった。
「舟じゃないの、あれは」
「バカ言ってら、あんなにたくさんの舟なんて」
「舟、舟よ、たしかに舟だわ」
ユカラは足の下の岩がにわかにくずれるような目まいにおそわれた。
舟だ、たしかに。それも五十や六十ではない。いや百そう以上、二百もいるかもしれない。

（二）

阿部比羅夫は、じっと近づく港をみつめて、大船団の一番前の舟のへさきに立っている。
越の国守であるからこそ編成できた百八十そうの大船団である。比羅夫はだまっていても心から笑いがこみ上げてくる。この日本でいま、百八十そうの船団を集めることのできるものが他にいるか。
白布のバカめ、能登から、陸路をたどりやがった。
比羅夫が中大兄皇子に言ったとおり、能登軍団の隊長・白布は、比羅夫が征討軍の隊長になることに、はげしい反対を示した。しかし中大兄に一喝されるや、しぶしぶ能登まで副隊長として一緒に来たが、七尾の港に集まる大船団を目にするや、にわかに「おれは陸路をとって、海と陸から奴らをはさみうちにするのだ」と言いのこして能登軍団の生きのこりをひきいて、さっと立ち去っていったのであった。
——お前など、もう来なくてもよい。おれ一人で蝦夷と出雲族はうちとってやるわ——
比羅夫はニッコリ笑いながら心でつぶやく。船はいよいよ齶田の浦に近づいた。
「闘いの用意！」

浜で立ちさわぐ人々を見ながら、比羅夫はどなった。
　百八十そうの舟の舷側には、矢をつかえた兵士がずらりと並ぶ。
「矢に火をつけろ！」
　その矢の先端に火がつけられる。
「うて！」
　一斉に火矢は、天をもこがす勢いとなって、浦で建設中の船めがけて波の上をとんだ。
　浜一杯にひろげられていた材木はいま火矢をあびて、めらめらと燃え上がる。
　その黒煙を見つつ、比羅夫はさらに船を近づけていった。
「あのほこらをうて！」
　比羅夫は次に命令する。
　矢はバラバラと岩の上のほこらへ向かってとんだ！
「おや」
　比羅夫のするどい目は、ほこらのかげから走り出した二人の子どもを見つけた。
　清麻呂とユカラである。

（三）

「清麻呂、ユカラ！」
　清麻呂は叫んでユカラのからだにとりすがる。
「にげろ、清麻呂！」
　叫びつつ弓月は走る。
　火矢がほこらにつき立って、ほこらも燃えはじめた。
　弓月は清麻呂を抱きかかえると、一気にほこらの中へとびこみ、銅鐸をもち出した。
「これだけは燃えさせて、たまるか」
　泣きさわぐ人々の中で、玉楯はぼう然と立ちすくんだ。
　雨と降る矢の中をかけてくる清麻呂とユカラを発見したのだ。
「何！　二人がどこに！」
　弓月は叫ぶと共に、もうかけ出している。
「清麻呂、ユカラ！」
　そのとき、ユカラの身体に矢がつき立って、ユカラがはね上がるようにして倒れた。
　見下ろす浜には、すでに軍船百八十そうがのりつけ、武装した兵士たちのもとに、男も女も煙の中を逃げまどっていた。
「弓月……」
　ほこらのかげから、蝦夷の首領ワッカが出て来た。
「残念だ」
「ワッカ、泣くな、又、別の時を待とう」
「しかし……」
「いいじゃないか。一応降参してこの地にとどまり、力をたくわえるのだ」
「弓月」
「ワッカ」
　二人はしっかりと手を結び合った。いつの日にか必ず――二人は目と目でそう誓いあったのだ。

（四）

「蝦夷の首領ワッカ。大和朝廷への恭順を誓うか」
「齶田の浦の神にかけて」
「よし、されば、春と秋の二回、大和朝廷へ青物を寄せるがいい。それがお前の恭順のしるしだ」

「鶏田の浦の神にかけて」
ワッカは歯をくいしばって比羅夫のことばに答える。
夜、かがり火の中で、蝦夷と出雲族は一まとめに座らされ、弓月が守った銅鐸はすでに比羅夫の手のうちにあった。
「今にみていろ」きっとその銅鐸をとりかえして、お前のひたいをこの砂にすりつけてやる。弓月も唇をかんでいた。
と、いきなり、一かたまりになっている蝦夷と出雲族の中へ、雨のような矢がとびこんできた。おどろく間もなくバタバタと倒れていく人々の上に、ドドッと迫る騎馬のひづめの音があった。
「能登軍団か」
比羅夫がうめいた。
「白布か！」
弓月が立ち上がった。
海岸の砂を巻き上げて、夜の魔物の如く能登軍団が迫る。
「うてっうてっ、奴らを皆殺しにしろ！」
叫んでいるのは先頭の白布にちがいない。
「比羅夫、卑怯者！　これが貴様のやり方なのか」
弓月はどなった。
「ちがう！　これは白布が勝手に」
「うるさい！」
弓月は一気にとんで白布の前に立った。
「くるか！　白布」
「おお！　弓月！」
白布の剣がうなりを生じて弓月の頭上をなぎ払う。一瞬身をしずめて弓月は白布の馬の腹下へ入るや、力一杯そこを切りつける。
棒立ちになった馬からとび下りた白布は、そのまま弓月の背後へ剣を光らせる。
「やめろ！」
比羅夫がどなった。
「比羅夫、殺せ！　奴らを生かしておくことはない」
と、白布。
「黙れ！　彼らはすでに大和朝廷に恭順を誓ったのだ」
「フン、信用できるものか」
「白布、征討軍の隊長はわしだということを忘れるな」
白布は、一瞬おそろしい顔で比羅夫をにらんだが、ハッとふりかえると、兵士を馬からひきずりおろすようにしてその馬にとび乗り、かけ去ろうとした。
「どこへいく」
「おれの勝手だ」
白布はみるみる遠ざかった。それは焼けおちたほこらの方であった。
弓月はふっといやな予感がして、人々の中をみまわした。そこには清麻呂と玉櫛の姿はなかった。
「しまった」
ほこらの近く、たしか清麻呂と玉櫛はユカラの墓をつくってやっていた。そうだ、くそっ。弓月は一散に走った。
「まて、白布！」
が、時すでにおそかった。
「弓月――っ」
絹をさくような玉櫛の声と清麻呂の泣き声。そして……、
「弓月、玉櫛は都へもらってゆくぞ」
という白布の声がひびいてきただけで、あとは日本海の怒濤が空しく岩をかんでいた。
（つづく）

ショートショート

糞奇談

水木しげる

私はかつて帝国陸軍の一員として南方の第一線に従軍していた。いつ敵がくるやもしれず、というので昼間は穴掘りにケンメイだった。夜は疲れてしまって、よほどの事でないと目が覚めない。私は生まれつき眠りに弱かったから、特にそうだった。しかしその夜は目が覚めたのである。だが、その時はすでに大便が肛門のところまできていたから、夢中でそこにあった靴をはいて便所へ猛進した。よほどあわてたのであろう、私は足をふみはずして片足を糞の中につっこんでしまった。おりからの南方の猛暑のために水分が蒸発してしまっているのだ。そこへ七〇キロの巨体でふんばった片足を落したのだ。すごい粘りはまるでつきたての餅の中にふみ込んだ心地だった。私はその時はじめて目が覚め、そしてあわててはいた靴が班長殿の靴であった事に気づき驚いた。

一体この班長殿の靴をどうしたらいいのだろう。ともかくこの餅様の物体の中から靴をとりあげねばいけないと思った。私は必死で、ありったけの力をもって餅に靴をとられないように注意しながら足をあげた。それは想像以上の力を要した。

闇夜に下をみると、まるで大きな鏡餅の様にネットリとした糞があるではないか。

悪いことにそこは山上であり、水は飯おけに一パイあるだけだった。

夜空をながめてその時つくづく思った。本当に困ったとはこういうことをいうのだろう、と……。

私は仕方なく、粘着力の強いその餅をとる作業にとりかかった。が、まるで大きなチュウインガムのようにくっついてはなれないのだ。あわてた私はめし桶の水につけたが、きれいにならない。班長の靴はやむなくジャングルに投げ捨て、めし桶の水は捨てて寝た。

朝五時に早くも点呼である。全員整列したのだが、班長は片方の靴がどうしてもみえないのであわてていた。

私はめし桶のことが気になって落付かなかった。食事当番でもないのに山の下にある炊事小屋までめしを取りにゆく事を申出たが断られた。

飯が運ばれてきた。おおあのおそるべき桶に山と入れられているのだ。なにしろ水のない所だから桶を洗うことは十日に一度しかない。

私はあわててめしを盛った。なるべく中央の部分を盛り一番底の部分は普段とてもいじのわるい軍曹に盛ってやった。

嗅いでみたが私の分は何ともなかった。が、軍曹の分はたしかにうすく色がついている様にみえた。

南方のジャングルの中で、はげしい作業が続き、待望の食事になった。皆は嗅覚がマヒしているらしく異状をうったえる者は誰もいない。

おおこれでこの糞事件も無事解決かと胸をなでおろしていると、軍曹が本部からかえってきた。

「おい今朝は本部で食ってきた。お前食べてくれよ」と肩をたたかれた。

しまった！早く立去るべきであったと思ったが、後のまつりである。

当時、みな腹ペコだったからこんなことは異常な親切といわねばならぬのだ。食べなければよけいあやしまれる。私は事態を無事に平和的に解決すべきだと考えて、カンネンのマナコをとじ、その糞飯をたべた。苦しみにもだえつつ……

—完—